

# 推しと旅する世紀末

オコSunday

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バイオハザードのような世界で俺は君を守る。

※これはIRIAMとゆう配信アプリにて最推しによる最推しの為の小説。つまりは自己の妄想を爆発させた作品でございます。それでもいいならようこそコチラへ♪

——あと名前を出した本人からは確認済みです

# 目次

第一話【推しを迎えに】	1
第二話【脱出or探索】	3
第三話【決意】	6
第四話【邂逅】	8
第五話【絶体絶命】	12
第六話【隻腕】	15
第七話【仲間】	17
第八話【喪失】	20
第8・5話【小倉あんこの追憶】	26
閑話【日常編】	30
第九話【救済】	33

## 第一話【推しを迎えに】

謎のウイルスによって人々が蠢く肉塊と化し、荒廃してしまった世界。そんな世界で俺は今日も今日とて醜く生き足掻いている。

だが今回は少し事情が違う。辛うじて起動しているSNSを通じてある場所へ助けにもとい、お迎えに向かっているところだ。……めっさ長距離だけでも。

「Foooooooooooooooooooo!!!風が気持ちいいぜえええ!!!でも腐った臭いいいいいいい!!!」

パンデミックの影響により、大破した車の波をバイクで駆け抜けながらヤケクソ気味に叫ぶ。ゾンビは大丈夫かって？アイツら動きはのろいから捕まらなければ無問題。なんならこっちはバイクだ。余程のことがない限り追いつかれることはまず無い。

バイクを走らせること約半日。道中色々……ホントに色々あったけどもう少して目的地だ。すでにここから指定されたショッピングモールが見える。——蛇足ではあるが、合流するとゆう名目で迎えに行くので、武器などは余分に持ってきてある。

さて、そんなこんなで目的地に着いた訳だが……めっさゾンビおるやん……。とりあえず着いたことだし、SNSに到着したことを送信する——秒で帰ってきた。

「屋上にいますー！ドアの向こう側でゾンビが沢山いるのでそちらに行けません!!助けてください」

（……）  
どうやら屋上にたてこもってるらしい。ものすごくメンドー——困ったことになった。それはお迎えに行く道中、アイツらを接客しながら5階上の屋上まで迎えに行かなきゃ行けないとゆうことだ。

——え？接客じゃなくてぶっ飛ばすんだろだつて？……相手するって意味では同じじゃない！皮肉で言ってるんだよこんちくしょうめえ!!

「H A H A H A！いらっしやいませお客様ア!!残念ながら本日限りをもって当店は閉店致しましたア！お残りのお客様は速やかに土に御

「還りくださいませエ!!」

ヤケクソ気味に、しかし的確に頭部をボールで破壊しながら止まっているエスカレーターを駆け上がる。何度でも言うが、奴らは動きが遅い。力こそ強いがそれさえ気をつければ狙うのは容易なことだ。

「おいーっスおぐりん！オニイサンがお迎えに来たゾー!!生きてるかーい!!」

若干うっぶんが溜まっていたので、屋上のドアを全力で蹴破り辺りを見回す。貯水タンクの近くにいた。服は多少汚れたり所々破れたりしているがそこには確かに生きている女性が――

「やっとなってくれたー!遅いですよお!!」

「げぼあ!!」

お、お腹におぐりんの頭部がダイレクトに……吐きそ。いや、朝から何も食ってないから吐くもクソもないんだけども。

飛び込んできた張本人を見下ろすと、小さい体をガタガタと震わせながらすすり泣いていた。――無理もない。女性1人で数日とはいえ、アイツらがすぐそばで徘徊しているのを耐えていたのだ。そうとう精神をすり減らしていることだろう。

「大丈夫、俺が来たからには嫌と言っても生かすからな。文句は受け付けておりませんのでご了承のほど」

「グスツ……ふふっ、なんですかそれ?でも……アナタらしいですね。ありがとうございます」

すすり泣くおぐりんの背中を、ポンポンと一定のリズムで優しく叩きながらおちやらせる。そんな俺のいつもの様子に安心したのか、目尻の涙を拭い笑顔を見せる。

――とりあえず今は新しい拠点探しを行いますかね。……でもその前に、

「……笑顔のおぐりん尊いゴフォ!!」

「ええ!!?ちよっとな!!しっかりしてください!!」

## 第二話【脱出 or 探索】

「だ、大丈夫ですか？」

「ゴフウ……、大丈夫だ問題ない」

「あの、むしろ問題しかなさそうなんですけど……」

危うく尊みで浄化しかけた所をなんとか持ち直して、こちらを心配そうに見上げるおぐりに無事の有無を伝える。何故か物凄く呆れた目で見られたが、我々の界限ではご褒美ゲフンゲフン……。

……さて、いつまでもこの至福の時間を味わっていたいけども状況が状況だ。この場所はかなりの物資に恵まれてはいるが奴らの数が尋常じゃないほど多い。ずっとここに居るのは賢明な判断とは言い難いため、新たな拠点を求めて脱出することにした。

「おぐりん、とりあえずコレで自衛してくれ」

「……スコップ？これでなにをすればいいんです？」

「コイツの先つちよでアイツらの首をチョンパ」

「無理です!!」

そうか無理かあ……しようがない。それなら俺がおぐりんを守りつつ、アイツらに突貫して退路を開くか。

——数十分後——

そんなこんなで道中邪魔してきたヤツらを、この万能器具であるボールで速やかに御還りいただきてもらいながらようやく脱出に成功。後ろでおぐりんが青い顔をしながら口を抑えているが……スルーしておこう。どうせ嫌でも慣れることになる。

駐輪したバイクの元へ向かうと、周りにはそれなりの数のゾンビ共がたむろっていた。こっちはおぐりんを迎えに行ったり、脱出したりでかなり体力を消耗しているし、なにより毎回毎回ヤツらの相手をするのは面倒だ。前々から用意していた防犯ブザーの1つを鳴らして、バイクより少し離れた場所へ投げる。……よし、いい感じにいなくなっただな。

「おぐりん！早く後ろに乗って！」

「はい！」

「俺にしつかり掴まって！」

「こうですね！」

おっふいい匂い……、じゃねえ!!

背中に感じる至福の感触といい匂いをもつと感じていたいゲフン！ゲフンゲフン!!……失礼。

おぐりんを後ろに乗せ、バイクを急発進させてその場を後にした。街道に出たからしばらく走らせていると、なんとも独特な雰囲気をつ店が目に入る。

「なあ、おぐりん。これってなんの店？物凄い独特な雰囲気を感じるんだけど……」

「え？……ああ、ここはガンショップですね。色んな種類の銃が売ってるんですよ」

「は？ガンショップ!?このご時世に!?……よく営業できてたな」

なんとゆうご都合主義……。いや、ここは運が良いと思う事にしよう。じゃないと色々と面倒な気がする。

店の前にバイクを止め、店の中へと入る。銃の名前は分からないが、種類豊富でかなりの数の銃が置いてある。

「うああああ……」

「そおい!!」

入店すると同時に横から初老のゾンビが襲いかかってきたので早急に御還りいただく。……あつぶね！ドア開けた途端にコンニチハつてか。少しでも引つかかれたりしたらそこから菌が広がって1発でオダブツだ。改めて気を引き締めないといけないと実感した。

「あのお……、逆にあの状況での確に迎撃してましたよね？どんな反射神経してるんですか？」

後ろからジト目で見られているがスルー。——あえて言うなら経験です。そのうち嫌でも出来るようになるヨ！（遠い目）

目の前の障害も排除出来たので改めて中を物色。

拳銃、マグナム、機関銃、サブマシンガン、ライフル等々……様々なジャンルの銃火器が置いてある。いや、なんでホントにこんな種類豊富な？よく国から営業OK出たな。そこんところホントに謎な

んだが……。

その後、俺はマグナム。おぐりんは機関銃&サブマシンガンを選んでその店を後にした。

——その後…

「あはははははア！見て見てオコ様！どんどんゾンビが減っていつてますうー！」

「おぐりん!?!」



### 第三話【決意】

おぐりんが機関銃ブツパのトリガーハッピー状態からようやく戻ってきたその後、俺達は無人の教会を新たな拠点として疲労を回復していた。——この教会は人影すらなかったが、幸いにもゾンビの一体もいなかった。何故かは分からないが、ゲームで言う安全地帯のようなものだと思得させる。

侵入されそうな窓も全て塞ぎ、今は真上のステンドグラスが日光で神々しく俺達を照らしていた。

「あの……本当にすいませんでした。……かなりご迷惑をおかけしてしまつて……」

「いや、別にいいんだけどさ……、それよりもおぐりんが発砲した瞬間のあの光景に驚きすぎて色んなもんがふつとんだんだが……」

「うう……わ、忘れてくださいッ」

さっきの事が頭から離れず、思わずジト目で見ると、おぐりんが恥ずかしそうにもじもじとする。……恥ずかしがつてるおぐりん可愛い……っじゃねえわ！毎度毎度しつかりしろ俺エ！——と、自分との葛藤で身悶えしていたが、隣でうつらうつらと船を漕いでいるおぐりんを見て正気に戻った。

あのシヨツピングモールに一人で数日間耐えていた事もあり、あまり眠れていないのだろう。今回は俺も長旅だったこと、それにおぐりんを迎え&脱出の時のゾンビ戦でかなり体力を消耗している。しばらく休んでもバチは当たらないだろう。

「おぐりん、無理せず寝ときな？今はアイツらもここに襲ってくる気配はないし、なんなら俺も見張つとくからさ」

「はい……すみません。それじゃあご厚意に甘えさしてもらいます……。……すう……すう……」

「えっ？ち、ちよつとおぐりん!?……秒で寝たし」

いや、確かに寝てもいいと言ったのは俺だけだし、まさか俺の膝を枕にするとは思つても見なかったなあ……。……クツソ、寝顔が可愛い過ぎるんよお……。

「すう…すう…、ううん…」

「……………ははっ」

推しの可愛いさに思わず浄化しかけたが、安心した顔で眠るおぐりんの寝顔を見て微笑する。髪が顔にかかって寝ずらそうにしていた為、髪を手櫛で梳かしながら優しく頭を撫でていく。

建物自体の造りもあつてか、ここは外の音があまり入ってこず、室内の温度もちょうどいい。……………少し眠くなってきた。寝顔につられて欠伸が出てきたので、俺も仮眠をとる事にする。それなりの食料品はリュックサックに詰め込んでいることだし、物資の調達は休憩した後でも十分だろう。

—— おぐりん……………大丈夫、心配することはないよ。アンタの命は俺が絶対に守るから。……………たとえ俺がどうなろうとも。

ステンドグラス越しの日光のほのかな温かさに照らされながら、俺は決意を心に刻んで静かに目を閉じた。

## 第四話【邂逅】

新しい拠点を確保してから約半月。あれから物資の確保や、安全地帯の拡張作業、それに伴った野菜畑作り等、わりと充実した毎日をごしていた。色々あったが今はそれなりに安定した暮らしをしている。

『あははー♪どんどん撃ちますよー！汚物は消毒ですよー♪』

『おぐりん前に出過ぎイ!!あと無駄撃ちし過ぎイ!!』

——別の曰。

『今日は安全地帯の拡張をします。おぐりん?分かってると思うけど、くれぐれも弾の無駄遣いは……』

『あ♪ゾンビー♪』

『おいしいいいい!!話聞いてたああああ!!』

——またまた別の曰。

『はい、弾の無駄遣いで残り弾数が心許なくなってきたので、今日は近接戦闘でのお勉強となります』

『……は〜い』

『おいコラ、明らかにテンション下げるんじゃないよ』

『いや、説明しながら片手間にどんどんゾンビなぎ倒してるオコ様に言われましても……』

『最終的にはここまで出来るようになってもらいますよー?』

『普通は無理ですからね!!』

……本当に色々あったなあ(遠い目)

まあ、その代わりにお釣りが帰ってくるほどの収穫もあった。物資の充実もだが、戦闘面で心強い仲間が出来たのである。世界がこんな風になる前にSNSで知り合っていた人だ。

その名も「ミレア」。狙撃術に長けており、スナイパーでの一撃必殺を得意としている。体の細さや、体格で一見女の子に見えるが……男だ。……男なのだ。大事なことなので二回言った。俺とおぐりんは初見で女の子と間違えて、その後びっくりしたのはいい思い出である。

「オコサンデエー、とりあえず近辺を彷徨いてたゾンビは全部やっ  
いたからー」

「ありがとうミレア。……ちなみに弾の消費量は？」

「計14発。全弾命中一撃処理」

「うん、パーフェクト」

流石はミレア。的確に弱点を狙い撃つその技術……惚れ惚れし  
ちやうね！そこにシビれるあこがれるウ！え？おぐりんも銃使える  
だろって？……あの子は癒し枠だからいいんだよ（目逸らし）

ん？皆の名前が独特過ぎるって？そりやそうだ。だってSNSで  
使ってた名前だからな。誰がいつ死ぬか分からないこんな世界だ。  
もしもの時に少しでも心の負担を減らせるようにと思って、俺がみん  
なにSNSの名前で呼び会おうと提案したのである。まあ、今となつ  
てはこっちの呼びの方が気に入ってるし、なんなら本名より愛着があ  
るくらいだ。……正直言うとなんかの名前を覚えるのは得意じゃない  
し、俺も俺で覚えづらい名前なのでなにかと面倒なものもある。

「そんで？オコサンデーは今日何する予定？」

「ああ、ちよつと弾の補給に行こうかと思つてな。……主にマシンガ  
ン系統の消費が激しくて」

「あつ……ふーん（察し）」

「……？2人してこっちを見てどうしたんですか？」

ミレアに言った通り、今日は弾の補充だ。俺はボールやナタ等と  
いった近接戦闘を得意とするが、おぐりんやミレアは銃がメインの遠  
距離戦だ。銃弾は消耗品だから定期的に回収に行かないと、もしもの  
時に無くなつてオダブツなんてなつたら笑えない。

「今回は俺1人で行く。ミレアとおぐりんは拠点で待つてほしい」

「んー……分かった。じゃあ僕は今まで通り近辺を警戒しとく」

「オコ様……1人で大丈夫なんですか？無理……しないでくださいね  
？」

二人には拠点に待機してもらつて俺は一人で弾の回収することに  
する。ああ、推しがえてえ（定期）

……ゲフン、失礼。とりあえず目的地はあの日からずつとお世話に

なっているガンショップだ。何回か回収に行ったときに分かった事なんだが、あの店は裏のほうに地下倉庫があり、物凄い量の弾薬が保管してあった。……本当に、なんであの店……国から経営許可出たんだろつな……。

道中ゾンビ達を必要最低限減らしていく。この道は毎回通る度に倒していつてるとゆうのに、どこからともなく湧いて出てくる。地域的な事も考えてここまで出てくるのは明らかにおかしい……。いったいどこからこんな数のゾンビが発生しているとうゆうのだろうか。

——ふと目の前からなにか大きなものがこちらへ飛んできた。……あれは……瓦礫か!?

「どわあ!?!……あつぶねエ、もう少してサンドイッチになるとこだったわ」

認識してから、当たるストレスの所で避ける。頭から生暖かいものが垂れてきた。……今で額を少し切ったか。——ふと瓦礫が飛んできたほうから血なまぐさが強くなった。

「……は？なんだよ……アイツは……ッ!？」

ソイツはとても大きく、体長は2mは超えているだろう。火傷したかのような真っ赤な肌に、パンパンに膨らんだ筋肉質な体。……なによりも目に付いたのはソイツの巨大な異形の右腕。まるで骨がそのまま飛び出てきたかのような不揃いの大きな爪。その爪には大量の血液が付着していた。……あの血が生存者の物なのか、それともヤツらのものなのかは分からないがどの道、ヤツが危険だとゆうことには変わらない。

(アイツはやばい……間違いなくやばい!!……この場はなんとかして逃げないと!!)

「……と思ったけど、そう簡単には逃がしちゃくれねえつかあ!!」

「グオ、オオ、オ、オオオオ、!!!」

「うるっさいんだよボケがア!!」

生き残るにはこの場から逃げないといけない。でもその前になんとかしてアイツの隙を作らないと……。今、俺の手元にあるのは、

ボール、ハンマー、ナタ、手斧の計四つ。……これならミレアに銃の扱い方を教えてもらえばよかつたと今更後悔しても仕方がない。

——覚悟を決めた俺は奴へと向けて駆け出した。

【MISSION 1・CYCLOPES】

## 第五話【絶体絶命】

【拠点・廃協会】

「……オコ様、大丈夫かなあ」

待機中の【小倉あんこ】が備え付けの椅子に寝転びながら一人呟く。そわそわと落ち着きがないあたり、それ相応に心配しているようだ。「いや、大丈夫でしょ。オコなんだし。あんこと合流する前は一人でずつと生き抜いてたくらいだし」

「それは……そうですけど……」

一方で、同じく待機していたミレアは、オコサンデーの戦闘を間近で見る機会が多いため、それなりに信用しているようで、逆に落ち着いていた。

「でもおかしくないですか？ミレアとオコ様がここ最近かなりの数のゾンビを倒してるのに、減らないどころかむしろ増えていつてる気がするんですよ？」

「……確かに。それは僕も前からそんな気はしてたけど……言われてみれば確かにこれは異常だよな。僕とオコがかなりの数を倒してるはずなのに全滅するどころか、減ってる兆しもないし……」

あんこの意見により、ミレアも改めて違和感に確信を得た。拠点周りのゾンビは毎日掃討している為いなくなつたが、他の場所も物資を回収する際にそれなりの数を倒している。場所的にもそこまで人が多く住んでるような場所でもない。先程から感じる違和感を胸に二人はステンドグラスを見上げていた。

【街道・商店通り】

「ぜエ…ぜエ…っ。クッソ！こいつ無駄にしつげえ！」

「オオオオオオオオ!!!」

「吠えるしか脳が無エのかテメエは!!」

あれからどれだけ時間がたったことだろう。何分……何十分……それどころか数時間経過してるようにも錯覚する。ボールで殴りかかろうと、ハンマーで潰そうと、ナタで斬りきぎもうと、手斧で叩き

斬ろうとも……、奴には効かず、潰れず、再生し、刃を止める。それにパワーが尋常じゃない。さつき防御に使ったボールが一撃でオシヤカになった。その際に左手が痺れて感覚が麻痺してしまった為、今は右手のナタだけでなんとか耐えている状態だ。

隙を見つけて逃げようが、奴はひとつ飛びで間合いを詰めてくる。……正直言って生存は絶望的。圧倒的な身体能力の差に諦めざるを得ない。

「——でも俺はなあ？あの日誓ったんだよ……」

あの日、おぐりんを助けた日。眠ったおぐりんの目から一筋の涙が出てた。怖い、助けて……って言ってたんだ……。

「命をかけてでも……あの子を守り通すってなア!!だから俺はこんな所で絶対にくたばってやらねってんだよこのバアアアアアアアアアア!!」

言葉が通じないのは分かってる。これは俺自身に対する魂の誓いだ。そう簡単にくたばってたまるか!

ウエストポーチから黒い粉だ大量に詰まった袋を取り出して投げる。それを奴は反射的に爪で切り裂き、中身の黒い粉が舞う。……それを待ってたんだ。

「こいつで弾け飛べやデカブツ」

寸前でマツチの火を着け、奴に向けて投げる。瞬間……

——閃光と爆音

凄まじい衝撃により、俺まで吹っ飛ばされる。

奴に投げつけたのは、たつぷりの火薬が詰まったミレア特性の爆薬だ。……それにしても凄い威力だな。それなりに離れていたのに危うくこつちまで巻き込まれる威力だったぞ……。ミレアまじでミレア。

「いってて……、マジでヒビはいったかも……」

痛む体を引きずりながら爆発で発生した黒煙を見る。ヤツがこつちに来る様子は見えない。あれだけの威力の爆発を至近距離で受けたんだ。倒してなくとも、少なくとも再起不能くらいにはなっ



い。

「……は……は……は……。マジかア……」

黒煙の中から影が見えたと思ったら、ヤツが足音をたてながらこちらへ歩いて来るのが見えた。所々、抉れてたり、体のパーツが吹き飛んでいたりしたが、物凄い勢いで傷が再生していく。

——絶望はまだ終わらない。

## 第六話【隻腕】

盛大に爆破したにも関わらず、傷を再生させながら歩いてくる奴を見て俺はその場にへたりこんだ。

「クソが……なんだよそれ……！そんなんチートみたいなのアリかよ……」

正直心が折れそう……びえん。ってふざけてる場合じゃないか  
(笑)

なあ、オコSundayよお……死ぬないし死ぬわけにいかないって、さつき自分に言い聞かせたばかりじゃんか。こつちだってそう簡単にくたばるワケにはいかないんだよ。

奴も相応にダメージを受けているのか、格段に動きが遅い。俺は手元にあるナタを杖にして立ち上がる。

『グウ……ゴオ、オオオ……』

「フウ……。全く……諦めやすいのは俺にとつちやあ、いつものことだけど……それでも諦めるのはここじゃないよなあ？」

そう言っただけ俺は奴に背を向けて全力でその場から逃げ出す。あんな勝てる見込みもわからないチート野郎にはまともに相手しないのが1番だ。

先程の大爆発で奴の動きは普段のゾンビ共くらいにとろい。つまりは今がチャンスってことだ。

「へっ……三十六計逃げるに如かずってね！」

幸いにもバイクは爆心地から遠めに停めていたため、多少傷だらけではあるが動かすのに特にこれといった問題もない。急いでエンジンをかけて急発進させる。

「またなクソ野郎!!もう二度と会いたくないけどなあ!!」

爆速で追い抜く周りの景色と共にサイドミラー越しに、奴の姿がどんどん小さくなっていく。生き残ったもん勝ちだ。文句は受けつけないし言わせない。

——奴とかなりの距離が開き、完全に油断しきってきた。これで奴もここまでは追ってこないし、諦めるだろう。その考えを俺は一生後



## 第七話【仲間】

——左腕が無くなった。

世界がこんな状況だ。いつかはこんなことも起こるだろうと頭の片隅には思っていたが……、いざ実際に体験してみると心は冷静さを無くし、その場に蹲りながら傷口を押さえるしかできない。マンガやアニメみたいに、気にせず立ち向かう主人公のようなことなんて出来ない。これが現実だ。

「ぐううう……ッ。畜生……畜生……ッ！」

悔しい……今の俺一人じゃ、どうやってもコイツに勝てない。生き残って最後まであの子を守るって決意して、啖呵まできつたのに結局こうなってしまった。

すぐそこまで来ているヤツの足音が俺の命を奪う死の音のように聞こえてくる。

顔を上げるとヤツが右腕を振り上げていた。恐らくあの大きな爪で俺を串刺しにするつもりなのだろう。

「……はは。上等だよ……その面、頭の中に焼き付けて……死んだとしても……いずれお前を呪い殺してやる……」

覚悟を決めてヤツを睨みつけながら、その瞬間をじっと見つめた。

——次の瞬間、何十発もの銃撃音がした。

そして、ヤツの体から無数の血が飛び散り、その体をよろめかせて後退した。

「オコ!!大丈夫か!?!心配になって追っかけて来たんだけど、何この化け物は!?!」

振り返ると銃を構えたミレアとおぐりんがいた。

ミレアはこの現状を見て珍しく声を荒らげている。一方でおぐりんは顔を真っ青にしてこちらへ駆け寄ってきた。

「いや……オコ様……その腕……」

無くなった俺の左腕を見て手当しようとしているが、かなり動揺しているのか涙目になりながら震えている。

「あははく……、ごめん。ドジっちゃった」

安心させようとして無理やり笑顔を作るが、逆効果だったようでポロポロと涙を流し始めた。

「もう！だから何度も無茶しないでくださいって言ったじゃないですか!!こんなになるまで無理して……体もボロボロになって……腕だつて……こんな……」

「あんこー！オコ！お話しするのはいいけどまずはアイツを何とかしてからだぞ!!」

ミレアに言われてヤツの方へ目を向けると、傷口を異常な速度で再生しながらゆつくりとこちらへ歩いてくるヤツの姿を確認した。

「りよーかい。……ごめん、おぐりん。お説教はあとで聞くからさ。止血と手当お願い。包帯グルグル巻きでいいから」

「グスツ……わかりました。でも、ほんとにあとでお説教ですからね！」

ミレアに足止めしてもらってる間に、傷口に大量のガーゼを当てて包帯を巻いてもらった。

この2人が来てくれたんだ。1人だったら諦めてたけど、今は1人じゃない！

「俄然やる気出てきた!!」

左腕が無くなった？まだ右腕が残ってるじゃないか。

まだ立ち上がれる

まだ武器を握れる

大事な仲間がいる

俺は1人じゃない

——だったら最後の最後まで足掻いてみようじゃねえか。

「そんじゃ、まあ——」

ミレアはスナイパーライフルを、おぐりんは二丁のサブマシンガン

を、俺は持っていたナタを握りなおしてヤツへ刃先をヤツへ向けた。  
「スリーマンセルで第2ラウンドだ！」

## 第8話【喪失】

ミレアとおぐりんが戦いに加わってから、戦況が大きく傾いた。  
「頭をぶち抜くッ」

ミレアが頭部を中心とした狙撃で注意を惹き――  
「どこを見てるんですか？」

おぐりんが大量の弾幕で動きを鈍らせ――

「っしやおラア!!足元がお留守じゃああああ!!」

俺が隙をついて斬る。

そして、この戦いで気づいたことが1つある。

ヤツは大なり小なり傷がつけば再生する。その時、少しではあるが肉質が全体的に柔らかくなるのだ。お陰様で1人のとき弾かれてたナタが面白いくらいにサクサク入る。

しかしそれでも一筋縄ではいかず、足の靭帯を斬って膝をつくまではもっていけるが、頭部をカチ割ろうとすると異常な程に大きな腕を振り回して妨害してくる。非常に厄介極まりない。

「あー!もー!オコ!!こいつメンドイ!」

「しゃーないだろ!俺だって1人で頑張ってたけど、コイツすぐに再生するんだって!」

「オコ様あー!弾無くなっちゃいましたー!」

「オイイイイイイイイイイ!?確かにあの弾幕攻撃はありがたかったけど、よりによってこのタイミングう!」

「そんな事だろうと思って予備のマガジン持って来てるよ」

「ミレア、ナイスー!」

なんだろう……。さっきまでシリアスな雰囲気だったはずなのにいつの間にかコミカルになってない?いやまあ、殺伐とした雰囲気よりはマシだけでも……。なんなら順調にじわじわとヤツの動きが鈍ってきているあたり、ものすごい手応え感じてるくらいだし。

それにしてもあのデカイ腕が邪魔すぎる。爪が異様に鋭いうえに長いから、至近距離で戦ってる俺の服が切り跡だらけだ。幸いにも肌までは傷はついてないので今のところ感染するリスクは低い。

『オ…………グオオ…………ッ』

「……………ん？なんだ？」

なにか様子がおかしいと思つたら、ヤツの大きい腕がまるで虫が這っているみたいでグロテスクに蠢きだした。ものすごく気持ち悪い。

『…………オオ、オオオ、オオオ、オ、オ、ッ!!!』

ヤツがひととき大きく吠えた。

骨と肉が混ざつてるような音をその大きな腕から響かせたと同時に、異常な速度でヤツの腕が更に大きく、太く、鋭くなつていく。

肩から骨のような角が皮膚を突き破り、二の腕は裂けて二本に分裂し、二本に別れた右腕の先には合計10本の爪が先程よりも大きく鋭利になった。

……………明らかに第二形態ですねわかります。

「ここで一つ。第二形態とかけまして、スゴロクととく」

「……………その心は？」

「どっちも、ふりだしからでしょ」

「上手い！」

「H A H A H A！」

「いや、なぞかけしてる場合じゃないんですけど!? 2人して現実逃避しないでくれませんか!?!」

おっと失礼。あまりにもショッキングすぎて現実逃避してたわ。

だってアレはさすがに無理だろ…。明らかに俺達を絶対殺してやるとばかりに殺意をビシビシと肌で感じる。

——ミレアが消えた。



いや、正確には吹っ飛んだんだ。後方へと。

「ミレアッ!?!」

「がアッ!?!……………ぐうううう…ッ!」

ミレアが後方へ飛んだ先に瓦礫の山があり、そこへ背中を打ち付けてしまったみたいだ。とつさにガードしたのか、頑丈なはずのスナイパーライフルがありえない方向へと曲がってしまったている。幸いにもライフルが犠牲になったおかげでミレア本人は打撲だけで済んでいた。

なんだ今のは!?!全然見えなかった……。

しかも俺たちがいる場所とはそれなりに離れていたはずだぞ!?!

右腕の二本に別れた片方の腕が触手のようにうねうねと軟体動物かの如く動いている。まさか……あの触手のような腕がゴムのように伸びて一瞬でミレアを攻撃したとゆうのか!?!俺たちに視認できない速度で……………!?!

『グロロロロロロ……』

そう呻いたヤツの顔は笑っているように見えた。

……………いや、明らかにこちらを嘲笑っている。

「テメエ……………何笑ってやがんだアアアアア!!!」

「オコ様!ダメ!!」

我慢できなかつた。お前らなんぞこの程度だ、と言われているみたいに思えて頭の中の何かが切れたんだ。

怒りの衝動と共に馬鹿正直にヤツに向かってナタを振り下ろした。

——ナタが折れた。

「……………え?」

全力で切りつけたつもりだった。だが、その刃はヤツの肉を切り裂くことは無く、まるで鋼鉄に打ちつけたかのような感覚と共にナタは根元からポキリと折れてしまった。

その一瞬で惚けてしまったのは完全に致命的だった。

ヤツの二本に別れていた右腕が交差して、1本の束のようになった肥大化したその腕で俺は殴られた。

「ぐぶウ…………ツ!!」

殴られた俺の体は簡単に宙へと飛ばされ、その拍子に内蔵をやられてしまったのか大量に吐血した。そのまま地面へと叩きつけられ、ボールのように2、3回バウンドしながら後方へと飛ばされた。

…………ダメだ…………今意識を失ったら…………おぐりんが危ない…………ツ。

それだけはダメだと、痛む体に鞭を打って無理やり立たせる。足が産まれたての小鹿のようにガクガクと震える。

ミレアの方を見ると、使い物にならなくなったライフルを杖の代わりにして立ち上がっていた。

先程の早さで攻撃してこなかったとゆうことは、こちらを完全にバカにしているうえに舐め腐ってる。

クツがツ！舐めプしてんじゃねえよツ！

待てよ……………まずい！今前にいるのはおぐりんだけだ！

前へ振り向くとヤツがおぐりんに向けて、その大きな爪で貫こうとしているのが見えた。

「あ……………ああ……………あ…………ツ」

ヤツの威圧感と殺気で声も出せない状態になっている。

俺は軋む体を無理やり動かして、おぐりんの元へとその足を走らせる。

頼む!!間に合ってくれ!!

ヤツは無慈悲にもその爪をおぐりんへと振り下ろした。

「オコ……………様？」

「ははっ……………良かった……………間に……………合っ……………た……………」

突き飛ばしたおぐりんが呆然とこちらを見ている。

腹が熱い……………喉から何か熱いものがまた込み上げてきた。

「ゴバア……ッ!!」

——おぐりんへ矛先を向けていたその爪は、突き飛ばしたおぐりんの代わりに俺の腹を貫いて真っ赤になっていた。

「オコッ!!」

「いやあああああああッ!!!」

2人の悲鳴が響く。

ヤツがその方向を見るがそうはさせない。俺はヤツの腕を掴み全力で抑え込む。俺の頭のリミッターが外れたのか、ヤツも上手く身動きが取れないほど力が出ているようだ。

「ミレア……頼む……このままおぐりんを連れて……逃げろッ!」

「オコ……でも……ッ」

「いいから行けえええええええええ!!!」

俺は振り絞って声を荒らげた。

「ッ!………分かった。行くよあんこ」

「嫌っ!いやあ!!だって………だってオコ様が!!」

「このままじゃ全滅だって!オコの覚悟を無駄にする気!」

「いやあ!オコ様アア!!」

ミレアがグズるおぐりんを引っ張って遠くへ離れていく。

そう………それでいいんだ………2人だけでも生きてくれ………。

2人が小さくなるまで見守ったあと、俺はヤツへと向き直る。

『グウウウウ……ッ!』

「よお………随分と………お行儀がいいじゃねえか………。………って俺が抑えてたから動けねえのか………すまんすまん」

笑いながらそう言うと、ヤツの俺を見る目がとんでもない殺意で満たされた。

………そうだ、それでいい。俺を見ろ。そうすればアイツらは安全に遠くへ逃げる事ができるからな。

こんなこともあるかとさつきミレアのバックからくすねといて良かったぜ。

俺はズボンのポケットからミレア印の爆弾を取り出してヤツの口へとねじ込んだ。

「こうすりゃあ流石のお前も再生出来ねえだろ？」

『ゴ……オ……』

「……あばよ」

そのままマッチで火を灯し――

――閃光と爆音に包まれた。

## 第8. 5話【小倉あんこの追憶】

私が彼と……オコSunday様と知り合ったのはIRIAMとゆう配信アプリからでした。

配信を始めて1ヶ月くらいだった頃、怪談話の枠を開いているときに彼がやってきたのです。それからとゆうもの、数日の間出たり入ったりして不定期に入ってきてくれましたが、いつの間にかほぼ毎日来てくれるのが当たり前前こようになっていました。

ときには一緒にゲームをしたり、リアルで落ち込むことがあって心配してくれたり、面白い話を聞かせてくれたりと——まるでそこにいるのが普通だと言わんばかりに毎回来てくれていました。

——そして、あの日。世界が地獄に変わった日から、私は近くのスーパーの屋上にたてこもって数日間……1人で不安に押しつぶされそうになってたとき……Twitterから一通のDMが入りました。

オコSunday:

「おぐりんそっちは大丈夫!?やばかったら迎えいくけど!」

まさかのあの人からでした。あっちも相当過酷な状況かもしれないのに私にDMを送ってくれたんです。それでも私は藁にもすがる思いで返信しました。

小倉あんこ:

「今、屋上でたてこもってます。……助けて」

祈る思いで返信すると、すぐに返信がきました。

オコSunday:

「了解。明日までにはつく。それまで頑張って生き延びてほしい」

そしてあの人は本当に私の所まで助けに来てくれました。この場所まで数百キロあるであろう距離を。

お互いに初めてリアルで顔を合わせるけど、それよりも助けに来てくれた安堵でそのままオコ様の胸に飛びこんで泣きました。

うう……今となってはちよつと恥ずかしいです。

合流してからとゆうもの、脱出する際のオコ様の快進撃はとても凄かったとしか言いようがないです。

工事現場の人が使ってるような道具で、ゾンビ達を蹴散らして出口への道を切り開いていきました。……正確には殴り倒すですけど。

それからはあの人が乗ってきたバイクに乗せてもらってその場を後にしました。後ろを振り向くと私がいたデパートがどんどん遠くなくなっていきます。

本当に生き残れたんだとゆう実感が湧いてきて、オコ様の背中により強く抱きつきました。

「ピョッ!」と奇声をあげながら体を震わせるオコ様の背中を見て、くすりと笑ってしまつたのはナイショです。

街を抜け、都合よく武器を手に入れ、安全地域も確保して、新しくミレアも仲間に加わり、全てが順調に思えました。

……でもその思いは全部ダメになつてしまいました。

オコ様が珍しく1人で物資を——弾薬を回収してくると言いいました。虫の知らせでしょうか……なんとなく嫌な予感がしましたが、ミレアも私も弾薬だけだしオコ様だからと完全に油断してそのまま1人で行かせてしまつたんです。

……それがダメだったんです。

いつもなら30分以内で帰ってくるオコ様が、1時間以上経っているのに未だに帰ってくる気配がしません。さすがに様子を見に行つた方がいいんじゃないかとミレアに声をかけようとした瞬間、とてつもない音量の爆発音が耳を刺激しました。

「この爆発音は……ボクの作った爆弾ツ!? あんこ行くよー!」

私はミレアに言われるがまま武器を持って、オコ様が居るであろう

場所へと足を走らせました。目的地に近づくほど、私の中にある不安の波紋は大きく広がっていく。

そしてやっとオコ様がいる場所に着くと、2メートル以上はあるであろう化け物と……

左腕を無くしてうずくまるオコ様がありました。

私は頭が真っ白になってその場に立ち尽くしました。すると横から化け物の頭部を狙い撃ったミレアに、オコ様の元へ行くように指示され、涙が流れないようにぐつと我慢してオコ様を治療しました。

なんでもないと無理して笑うオコ様があまりにも痛々しくて、私は涙をこらえきれませんでした。

そんな大怪我を負っても、オコ様はまだ戦うと言って、そのまま化け物へとかけだしました。だから私も必死にオコ様を後ろから援護しました。少しでも注意がオコ様からこつちにいくように。

敵の動きがだんだん鈍っていき、希望の光が見え始めたとき……… 私たちはまた絶望におとされました。敵の姿がより凶悪的な物に変わり、素早さもパワーも以前よりも強靱的に跳ね上がりました。

ミレアも吹き飛ばされ、オコ様も武器が折れて殴りとばされました。

前に残った私は、化け物がその凶悪な爪でこちらを貫こうとしているのを見ていることしか出来ませんでした。その爪が振り下ろされると同時に目を閉じた私は、誰かに突き飛ばされ、その場から離れた場所へと倒れ込みました。とつさに突き飛ばされた場所を見て、

——なんで化け物の爪がオコ様のお腹を貫通してるんですか？

そのままオコ様は化け物をすごい力で抑えこみ、私たちに逃げろと叫びました。私はなすすべもなく、ミレアに引きずられながらその場にオコ様を置き去りにしてしまいました。

そしてまた凄まじい爆発音が私たちを振動させました。

待って……………この爆発音……………オコ様の方から……………まさか!!

「ちよーあんこダメだつて!!」

私はミレアの手を振り払ってオコ様のいる場所へと走りしました。無事であつて欲しいと願いながら。

でもそこには化け物であつただろう下半身しかありませんでした。

……………いえ、本当は少し遠くに見えてました。

——おそらくオコ様であろう右腕と愛用していたジツポライターが。

「……………あ」

私は震える手でその腕とライターを一緒に抱きかかて、その場に膝をついてしまいました。

「あんこ……………その腕……………とゆう事は……………オコは……………」

頭の中で違うと否定したかつた。でもこの手の形は……………この手のひらのマメのでき方は……………完全にオコ様のだと理解してしまう。

「……………うあああああああああああツ!!」

「オコ……………オコ兄いいいいいいいいッ!!」

私が泣き叫んでも……………、ミレアが名前を呼んでも……………、返ってくるのは静寂とゆう残酷な現実だつた。

——私は……………この日、大切な人を失つた……………



## 閑話【日常編】

〈へからかい上手のおぐりん〉

安全地帯の教会を見つけて間もない頃…。

「オコ様ア、こつちの野菜の種の分は終わりました〜」

「おー、おぐりんセンキュー。そんじゃあシャワー浴びてきなよ。この暑さで汗かいただろうし、土いじりで汚れたでしょ」

「ありがとうございます。それじゃあお先にシャワー使わせてもらいますね。……あ、オコ様〜！」

「ん？なーに〜？」

「オコ様も……一緒に入りますかあ？」

「んな!?……ば！馬鹿言ってるんじゃないよ！いいから早くシャワー浴びてきなさい!!」

「はーい」

「……全く、歳上をからかいやがって」

『本人もああ言ってるんだし、チヨロつと覗くくらいいいんじゃないやね?』

「黙れ悪魔の俺！その手には乗らんわ!」

『そうです。推しとは影からこつそり支えるもの。悪魔の誘いに乗ってはいけません』

『出やがったな天使の俺!……でもよく考えてみる?お前の最推しの裸見たくねえのかよ?本人も良いって言ってたしちよつと覗くくらいバチなんて当たらねえよ』

『……推しとは影から支え、見守るもの。だから例えそれがシャワー中だろうと例外ではありません。さあ、行くのです俺よ』

「オイイイイイイ!!天使がそっち側に寝返ったらダメだろーが!なに欲望に素直になっちゃってんの!?絶対に行かねえかな!?」

「……オコ様1人で何をブツブツ言ってるんだろう?……あ、そーだ」「オコ様〜♪えいっ♪」

「え!?ちよっ!?おぐりんなにを!?!」

「ぎゅ〜♪」

「(鼻をくすぐるいい匂い……そして背中に当たるこの柔らかい感触

は……………」

『『ゲボはア!?』』 ↑吐血

「きや!?お、オコ様?大丈夫ですか!」

『『…………わ、我が人生に一片の悔いなし』』

結論。おぐりんは結構イタズラ好き。

〈リアルおとこの娘降臨〉

これはミレアが俺たちと仲間になったときの話。

「今日は天気もいいし、ちよつと遠めに物資調達にいくよ」

「はーい、わかりましたー」

「このこのスーパー初めて来たけど…………地味に数が多いな…。できるだけバレないように片付けていくから、おぐりんは周囲の警戒を願  
い」

「戦わないってゆう選択肢は無いですね…………」

「あ、言っておくけど、今回はそのマシンガン使用禁止ね?」

「どうしてですか!」

「音で外のゾンビが寄ってくるし、弾薬が勿体ない」

「あ、ハイ」

「オコ様!こんな所に女の子が!!」

「なんだって!?すぐそっちに行…………」

——ドツガラガラガツシャン!!

「オコ様ああああああ!?何やってるんですかあ!」

「…………テヘペロ♪」

「テヘペロじゃないですよお!!ってめちやくちやくこつちに来て  
るううう!!」

「やっちまったもんはしやーない!やるっきやないでしょ!」

——タアン!タアン!タアン!

「…………え?」

「う、嘘だろ?たった3発でほとんどのゾンビを同時に撃ち抜いただ  
と!」

「…………うるさくて寝られないんだけど?」

「え?.....その声.....まさか男オ!」

「いや待て.....その声.....もしかしてミレアか?」

「.....え?待って。もしかしてオコ兄?.....ってことは」

「そう、おぐりん」

「え!?!この子ミレアなんですか!?!」

「みたいだな。.....それにしても.....リアルでもおとこの娘とは.....こりやまたたまげたなあ」

「あ、それ私も思いました。リアルなおとこの娘を生で見るのは初めてです」

「可愛いなあ」

「うっさいよ2人とも!!それよりも後ろのアイツらどうにかして!」

「っしやおラア!!」

「って、まとめて串刺しにしたあああああ!?!普通出来るものなのそれ!?!」

「.....ミレア、諦めましょう。オコ様だからとゆうことで理解すればいいんです」

「出来るかあああああ!?!」

こうしてなんだかんだでミレアが仲間に加わりましたとき。

## 第9話【救済】

——ここは……どこだ……？

目の前の化物共を、ブレード状にした両腕で切り刻む。

——なんで……ここにいるんだ……？

横から迫る、2m越えの化物が突進してくる。

ジャンプで飛び越え、ブレードを脳天に突き刺す。

ひと息つくのもつかの間、奥の方から化物共の大群が押し寄せってくるが、俺の後方には避難した生存者達がいる病院がある。

その中には、絶望した大人や、明日に怯える子供がいる。……負ける訳にはいかない。

「ここを通れるなら通ってみろよ？その代わり……ぶつ殺すけどな？」

——誰が知っているなら教えて欲しい……

「つて、もう死んでるんだっけ？……んまア、どうでもいいか」

——俺は……誰なんだ？

### 〈拠点・教会〉

仲間が1人死んだことにより、ミレアとアンコの2名は、ショックが大きく、お互いに数日間塞ぎ込んでいた。

だが、その現状から先に復帰したのはミレアだった。

——あの人は自分達を守る為に命をかけた。だから自分達は生き延びなきゃいけない。……と。

そう言ったミレアの顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。そうして2人は身を寄せ合い、ひたすら泣いた。泣いて泣いて……声が枯れるまで泣いた。

いつの間にか2人は泣き止んでいた。2人の目には決意が宿っていた。

——あなたが守ってくれたこの命……絶対最後まで生き延びてみせるから。

——それから2ヶ月の月日がたった。

激しい銃撃戦の音が鳴り響く。しかしそれは一方的なものであった。

「ふう……。こちらアンコ、化物の駆除終わりましたよー。ミレアのほうはどうですかー？」

おびただしい化物共の残骸を前に、アンコは無線で通信を入れた。その両手には、前よりも新たなサブマシンガンが握られている。

〈スコープオンEV03〉軽量性と携行性に優れており、泥水や水に浸かっても使えるので、例えばアンコがドジっても使える一品である。

『こつちも雑魚ばつだから、すぐ終わったよー』

通信先のミレアの周りにも、化物の山がいくつも出来上がっている。

ミレアのその手にも、新しいスナイパーライフルが握られていた。

〈バレット M82〉簡単に言えば、軽車両の装甲をぶち抜く威力がある、アンチマテリアルライフルだ。射程距離は2500メートルまで及ぶ。

『こちら青空、化物共は完全沈黙した』

『こちらツバメ、同じくこつちも全部殲滅完了ウー！』

『プルレよ。こつちはあともう少しで終わるから。そこで、あんた達は手が空いてるならこつち手伝いなさい』

あれから仲間も3人増えて、今じゃ生存者も救助出来るくらいには戦闘力も増した。

〈部隊アウロラ〉——ラテン語で夜明けを意味するこの部隊は、現在「小倉あんこ」、「魅魔<sup>すだま</sup>ミレア」を筆頭に、「青空」、「ツバメ」、「プルレ」の5人で形成されている。

数こそ少数であるが、ひとりひとりの戦闘力が高く、数多くの化物<sup>ゾンビ</sup>共を葬っている。——が、ゾンビの数は減るどころか、ここ最近は人型ですらない化物まで出てくる始末。

幸いにも、空気感染することは無く、傷を負うことによる接触感染でなければ感染はしないようである。

——まだまだ夜明けの光は遠く離れていた。